

各関係機関の長 殿

福岡県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について(送付)

このことについて、病虫害発生予報第9号を発表したので送付します。

平成13年度病虫害発生予報第9号
主要病虫害の発生現況及び予報の概要

【野菜】

作物名	病虫害名	発生現況 (平成比)	発生予想 (平成比)
冬春トマト	灰色かび病 菌核病 葉かび病 コナジラミ類	並 並 並 やや少ない	並 並 並 やや少ない
冬春ナス	灰色かび病 うどんこ病 すすかび病 ミナミキイロアザミウマ	並 やや多い 多い 少ない	並 やや多い 多い 少ない
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 灰色かび病	少ない 並 並	少ない 並 並
イチゴ	うどんこ病 炭疽病 灰色かび病 アブラムシ類 ハダニ類	やや少ない やや多い 並 並 やや少ない	やや少ない やや多い 並 並 やや少ない
キャベツ	黒腐病 菌核病 コナガ	少ない やや多い 少ない	少ない やや多い 少ない
レタス	灰色かび病 菌核病	並 並	並 並
野菜共通	オオタバコガ	やや多い	やや多い

【野菜】

1 トマトのコナジラミ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく・前年並

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、寄生葉率は平均4.2%（平年：8.0%、前年：3.1%）であった。

イ 気象予報では、12月の平均気温は平年より低く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内外の雑草は、コナジラミ類の増殖源になるので除草を徹底する。

イ ほ場内に黄色粘着シート(ITシートなど)を設置し、コナジラミ類の発生状況を把握する。

ウ コナジラミ類に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

エ 農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める。防除薬剤については県野菜病害虫防除基準を参照する（以下の病害虫についても同様）。

2 ナスのすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

(2) 予報の根拠

発生予察注意報第2号（平成13年11月29日付、13病防第63号の2）を参照のこと

3 ナスのうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発病葉率は平均3.0%（平年：0.4%、前年：0%）であった。

イ ほ場間格差が大きく、一部ほ場で発生が多い。

ウ 気象予報では、12月の平均気温は平年より低く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 整枝・剪定を行い、通風、採光をよくする。

イ 不用な下葉は出来る限り除去する。

4 キュウリのべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発病葉率は平均0.2%（平年：3.8%、前年：6.7%）であった。

イ 気象予報では、12月の平均気温は平年より低く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 肥料切れになると発生が助長されるので、適正な施肥を行う。
- イ 換気を行い、多湿にならないよう管理する。

5 イチゴのうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

- ア 11月5半旬調査の結果、発病株率は平均3.9%（平年：6.0%、前年：1.6%）であった。
- イ 気象予報では、12月の平均気温は平年より低く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の初発生は、新しく展開した葉の裏に認められるので、上位葉裏面の病斑の有無を随時確認し、早期発見に努める。
- イ できる限り下葉かぎを行い、薬液が葉裏にもかかりやすくする。
- ウ 本病の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

6 イチゴ炭疽病

(*Colletotrichum acutatum* 菌による葉枯れ炭疽及び *Glomerella cingulata* 菌による炭疽病)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

- ア 11月5半旬調査の結果、発病株率は平均0.4%（平年：0.1%、前年：0.5%）であった。なお、一部のほ場では果実への発病もみられる。
- イ 気象予報では、12月の平均気温は平年より低く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病を認めた場合は発病部位を早めに除去し、焼却するかビニルで完全に包み込み、周辺株への胞子の飛散を防止する。
- イ 茎葉の濡れている時間が長いと感染、発病しやすいので通風を良くする。

7 キャベツの菌核病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 発生状況

- ア 11月5半旬調査の結果、発病株率は平均1.5%（平年：0.3%、前年：1.3%）であった。
- イ また、発生ほ場率は58.3%（平年：5.1%、前年：23.0%）で、過去10か年で最も高い。
- ウ ほ場間差が大きく、一部ほ場で多発している。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病後の防除は困難なので、県野菜病虫害防除基準に従って予防的に薬剤散布を行う。

- イ 発病株を放置すると感染源となるので、ほ場外へ持ち出し焼却処分する。
- ウ 菌核は土中で2～3年は生存し次作の感染源となるので、発生を認めたとほ場では、収穫終了後に残さをすき込まないようにする。

8 レタスの菌核病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発病株率は平均0.6%（平年：0.3%、前年：0.3%）であった。

イ 気象予報では、12月の平均気温は平年より低く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 地際部や葉の基部を中心に予防散布を行う。

イ 発病株を認めたら、菌核をつくらぬうちに早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

9 野菜共通のオオタバコガ

(1) 予報の内容

発生量：前々年より多く・前年並

(2) 予報の根拠

ア イチゴでの11月5半旬調査の結果、寄生株率は平均0.9%（前年：1.1%）であった。

イ キャベツでの寄生株率は平均1%（前年：0.3%、前々年：0.3%）であった。

ウ 広川町に設置しているフェロモントラップの誘殺虫数は、10月4半旬をピークに減少傾向であるが、施設の果菜類では今後とも加害が継続する可能性があるため注意が必要である。（第1図）

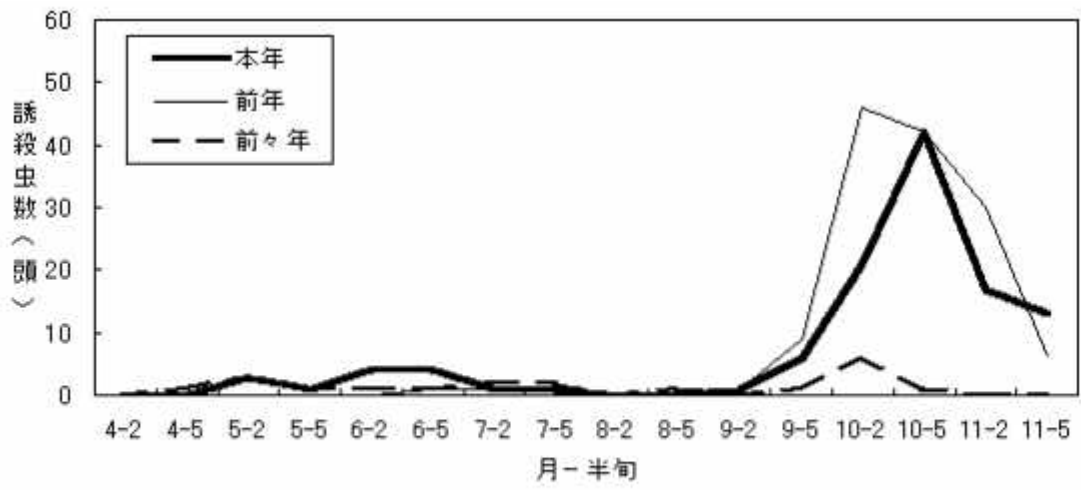
(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は連続的に発生するため、ほ場内をよく観察して早期発見に努める。

イ 中・老齢幼虫になると花蕾や果実に食入し、十分な薬剤の効果が期待できないので、防除効果が高い若齢幼虫期に防除を徹底する。

ウ 果菜類では、被害果の早期摘果と処分は、その後の発生を抑制するのに有効である。また、摘心した腋芽や花蕾、摘果した果実などに卵や幼虫が寄生している場合があるので、ほ場内やその周辺に放置しない。

エ 防除薬剤については、野菜及び花き・花木の各病害虫防除基準を参照する。また、農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める。



第1図 フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺虫数の推移
(八女郡広川町)

1 2 月の気象予報 (1 か月)

(予報期間 1 1 月 2 4 日 ~ 1 2 月 2 3 日)

2001年11月23日
福岡管区气象台発表

【概 要】

向こう1か月の平均気温は平年より低く、降水量および日照時間は平年並の可能性が大きいです。

【要素別確率】

(単位 %)

要 素	低 い (少 ない)	平 年 並	高 い (多 い)
気 温	5 0	3 0	2 0
降 水 量	2 0	5 0	3 0
日 照 時 間	3 0	5 0	2 0

- < 1 週目の予報 > 1 1 月 2 4 日 ~ 1 1 月 3 0 日
この期間の平均気温は、平年より低い可能性が大きいです。
- < 2 週目の予報 > 1 2 月 1 日 ~ 1 2 月 7 日
この期間の平均気温は、平年より低い可能性が大きいです。
- < 3 ~ 4 週目の予報 > 1 2 月 8 日 ~ 1 2 月 2 1 日
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいです。

参考資料

福岡における平年値

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間と1週目、2週目、3~4週目の平均気温

向こう1か月			平均気温 ()		
平均気温 ()	降水量 (mm)	日照時間 (h)	1 週目	2 週目	3 - 4 週目
9.5	59.0	116.1	11.1	10.0	8.7

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除について、ホームページとテレホンサービスでお知らせしています。アドレス及び電話番号は下記のとおりです。

ホームページアドレス

www.jpnp.ne.jp/fukuoka

電子メールアドレス

kfok0301@sp.jpnp.ne.jp

テレホンサービス

0 9 2 - 9 2 8 - 6 4 0 1 (普通作)

0 9 2 - 9 2 8 - 6 4 0 2 (果樹)

0 9 2 - 9 2 8 - 6 4 0 3 (野菜・茶)